

高杉晋作

池宮 彰一郎

Ikemiyu Shōichirō

Takasugi Shinsaku

上



〔著者〕池宮彰一郎 1923年、東京に生まれる。約3年間の陸軍体験をへて、シナリオを三村伸太郎に師事。シナリオの代表作に「十三人の刺客」「雲霧仁左衛門」などがある。'92年初めて執筆した時代小説『四十七人の刺客』で新田次郎文学賞を受賞。著書に、『四十七人目の浪士』『事変』『風塵』などがある。

たかすぎしんさく
高杉晋作(上)

いけみやしょういちろう
池宮彰一郎

© Shoichiro Ikemiya 1997



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

1997年9月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——大日本印刷株式会社

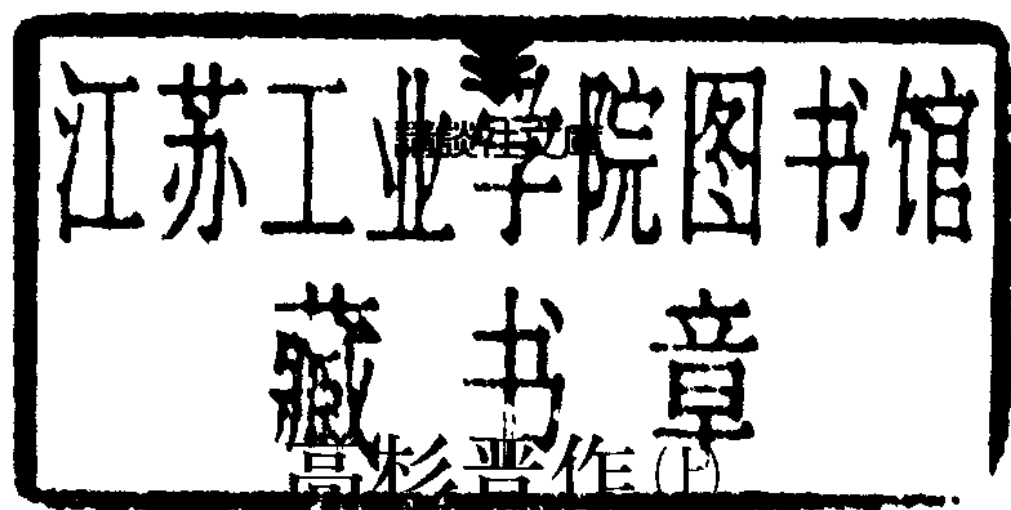
印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。 (庫)

ISBN4-06-263595-X

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



池宮彰一郎

講談社

目次

6	5	4	3	2	1
社稷将傾 しやしよくしやうけい	禁門の変 きんもんへん	奇策縦横 きさくじゆうおう	天歩艱難 てんぽかんなん	松下の白露 しやうかはくろ	酒旗の風 しゆきかぜ
273	213	145	101	59	7

高杉晋作

(上)

1

酒旗しゆき
の
風かぜ

文久二年（一八六二年）、五月。鉛色の空が、東シナ海の水面を覆おおっていた。
風が強い。

海面すれすれに、雨脚あまあしの幕を下げた黒い雲が走る。

四月三十日以来の時化しけは漸ようやくおさまる気配をみせたが、波濤は白馬の群れの競い合う如

く、波頭なみがしらが砕け飛ぶ。

森々びようびようたる海原うなほらに、三百五十八噸トン（一説には三百八十五噸）の小帆船が揺れていた。

その船に、高杉晋作が乗っていた。

「おい、針路がずれているぞ」

船橋へのつそりと上がってきた髭面ひげづらの船長リチャードソンは、舵輪ホイールを握る操舵手コーターマスターのスミテ

イに、鋭く声をかけた。

「これがおれの東洋での最後の航海だ、不様な航行をするな」

リチャードソンは、元は大西洋航路の貨客船の船長だった。それがハリファックス沖で時化に出合い、坐礁事故を起こして解雇された。以来リチャードソンは一攫千金を目的とする密輸船長の仕事を転々とし、東洋に流れてきた。それから中国沿岸を往き来する不定期貨物船の船長で荒稼ぎして、小帆船アーミスチスを手に入れ、長崎・上海航路で自前の貿易を営むうち、日本の徳川政府に船を売りつける幸運に出合った。彼はその金で故国へ帰り小型蒸気船を手に入れ、英国の近海航路で余生を送る計画である。気性は荒く欲深だが、船乗り根性に徹した男らしさも持ち合わせている。

「イエス・サー」

怒れば怖いリチャードソンの性格を知るスミティは、素直に答えた。

「右舵、十五度」

リチャードソンは、野太い声で命じた。

「右舵、十五度、サー」

舵輪が、カラカラと回る。

「ボート・イージイ」

「ボート・イージイ・サー」

英国の船乗り気質は船長に絶対服従で成り立っている。スミティは舵輪を修正した。

「舵中央」
ミジツ

「舵中央・サー」
ミジツ

「よろしい。この辺は潮が速い、風向きだけで修正していると、とんでもないほうへ流されるぞ」

リチャードソンは、船橋から甲板へ下りて行った。

階段下で、通路から出てきた中年の日本人と出合った。オランダ小通詞の岩瀬弥四郎である。岩瀬は年少の頃から語学熱心で、門閥に恵まれず小通詞にとどまっているが、長崎地役人中随一の達者と言われ、オランダ語のほか中国上海語に通じ、この時期、英語もかなり喋る。舌る。

「どうだ、日本の役人一行はみな元気か」

岩瀬は、苦笑で答えた。

「元気どころか、おとといの夜以来、みな生きた心地はありません。食事もとらずベッドで横になって、へとへとになっています」

「航海は順調だというのに、困ったものだな。日本人はよほど船が苦手とみえる」
にがて

「何ですと？ あの時化が順調な航海だと言うのですか？」
しけ

四月二十九日早朝、長崎港を解纜して以来、夕刻野母崎を過ぎるあたりまでは、リチャードソン船長の言う通り無事な航海だった。
かいらん

それが、夜に入ると風雨が強くなった。

四月三十日、船は五島沖をかすめ、外洋に出た。風雨酷烈、船旅に馴れない乗客ことごとく船酔に悩まされ、苦しんだ。

五月一日、颶風狂雨、船は木ノ葉の如く揉みしだかれ、船室では転倒する行李と苦悶する人がころげ廻った。

夜に入って風雨はややおさまったが、船は依然として揺れに揺れ、五月二日の朝になっても、乗客の船酔は続いた。

「あれが時化だと？」

リチャードソンは、目を剥いてみせた。

「時化でないとすれば、何です」

岩瀬は、むっとしたように反問した。

「少しばかりそよ風が吹いて、船が小憎らしく揺れたただけだ」

「……………」

呆れ顔の岩瀬を見て、笑いをおさめたりリチャードソンは、真顔になって訊ねた。

「あの病人はどうしているかね」

「病人？」

「ああ、乗船する時に、顔一杯赤い粒々が出ていた若い男がいた。いい年をして麻疹などと

いう子供なみの病氣にかかっている……」

「ああ、長州の……」

岩瀬が思わず口走ったのを、リチャードソンが聞き咎めた。

「チョウシュウ？」

長州、防州二国を領する毛利藩は、昨今攘夷派の魁さきがけとして、過激な動きを示している。

岩瀬は慌てて取繕った。

「いや、あれは江戸の役人、御小人目付犬塚鏖三郎えいさぶろうどのの従僕ボーイです」

「ボーイ？ 一度聞こうと思つていたんだが、日本の役人はボーイを採用するのに、自分より分別くさい男を選ぶのはどういうわけかね」

岩瀬は返事に窮した。従僕という名目だが各藩よりすぐりの侍さむらいで、幕府御小人目付、役料十五俵の小役人より身分が上である。

「その病氣の従僕がどうかしましたか」

岩瀬は、質問をそらした。

「その病人がな、毎夜航海日誌を借りに来る。時化でみんな船酔いに苦しんでいる時もだ。朝までに書き写して返しに来る。あれは日本の役人の中で一番見所みどころがある。ああいう人間がいれば、日本の文明開化も夢ではないな」

リチャードソンは、植民地を渡り歩く無頼で、人種的偏見が強い。原住民には詐術さじゆつと恫喝どうかつ

を事としている。そのリチャードソンが思いもかけず吐露した感想に、岩瀬はまじまじとその顔を見つめた。

欧米では〈極東〉という。アジアの東の果て。日本・中国・朝鮮の地域である。

その極東の海面を航行する外洋船は、ことごとくと言っていいほど、すべて欧米の船であった。

五十年ほど前、欧州大陸でワートルローの戦いのあつた年から、中国を支配する清朝は、英領印度から流入する麻薬・阿片^{アヘン}を禁止し続けた。

だが、その蔓延^{まんえん}は止まず、遂に一八四〇年、広東総督林則徐^{りんそくじよ}は強権を発動して英国商人が持込んだ阿片を焼払い、英清両国の間に戦端が開かれた。

いわゆる阿片戦争は英国の一方的勝利に終り、香港の割譲、五港開港と租借地設置を含む〈南京条約〉が締結された。

清国にとって屈辱的降伏を意味する〈南京条約〉は、十九世紀に過熱した帝国主義、植民地獲得闘争に火を放った。戦勝国英国を筆頭に、仏・独・蘭・伊、更に露・米等の列強は、大航海時代から競って建造した商船・軍艦を派して、地球上最後の最大貿易処女地〈極東〉の利権争いに狂奔した。

その〈極東〉の海を、わずか四百噸にも満たぬ小帆船が行く。外洋船というにはあまりにも小さい。船齢もとうに二十年を過ぎている。船尾に翻る国籍旗は珍らしく三ツ葉葵の紋章旗、日本徳川政府の持ち船であった。

四年前、安政五年に米国の強圧により、通商条約を結んだ徳川幕府は、その後も次々と西欧列強との通商を容認したが、国内の尊王攘夷派の激烈な反対に押されて、自らの海外貿易に実を挙げ得なかった。

だが、「万国交易は富強の源」という時流が、幕府の退嬰をそのままにしておかなかった。立場に窮した幕府は文久元年にロシア領アムールに和船亀田丸を派遣したが、なんら実効を挙げ得ず、翌年のこの年、中国への貿易船派遣となった。

辺境のアムールと異なり、列強の東洋貿易の中心地である上海への貿易船派遣は、幕府二百六十年の歴史上、画期的な企てであった。

幕府は、列強への面目を保つため、英人ヘンリー・リチャードソン船長が上海・長崎間貿易に用いていたアーミスチス号を買収、千歳丸と命名、使節として勘定吟味役根立助七郎ほか四名と、長崎地役人（医師を含む）七名、長崎会所役人三名、商人三名、賄方六名、水夫四名のほか、従者二十三名の計五十一名を乗り組ませた。そのうち江戸役人の従者八名と

長崎地役人の従者九名中五名は、西国雄藩さいごくゆうはんの選んだ藩士を当てた。その事も鎖国令下に於て画期的な出来事と言えた。

——西国雄藩に、海外貿易の重要性を認識させなければならぬ。

幕末期にさしかかつて、外庄にいち早く目覚めたのは西国諸藩であつた。そのため攘夷・開国の論議が沸騰して、幕府を悩ますことが多い。その点、京畿けいき以東の諸藩は、御三家の水戸藩を除いては時流に鈍感で、佐幕の祖法に凝り固まっているので扱い易いが、この国難とも言える厄介やっかいな時勢に何の助けにもならない。

幕府は、とかく過激に走る西国諸藩に手を焼きながら、一面その武力をひそかに頼みにしていた。

それで、画期的な貿易使節の渡航に、希望する西国諸藩の有為ゆういの士を同行させ、幕府に同調ないしは理解を求めよう、と考えた。

ここまではいい。画期的の名に恥じぬ快挙である。だが、二百六十年培つちかつた〈因循いんじゆん〉が本性しやうしやうを發揮した。

上海に貿易使節を派遣するのに、幕府は清国との間に外交関係を樹立していない。幕府はオランダ領事の仲介を頼んで外交関係ぬきで出貿易を試みるという姑息こそくな手段をとった。

その姑息は、貿易使節の顔ぶれに現われた。二百六十年の鎖国を一擲いつてきする趣旨であれば、徳川政府の将来の海外貿易を取仕切る有為な人材を選抜すべきであるのに、洞察力も定見も